

■ コロナ禍を幸運と呼ぶ勇気 ■

北陸の厳冬は、先週も大雪を降らせたが、週末から気温は上がり、春の訪れが感じられるようになった。どこかで春が生まれているのだろう、3月に入ると気持ちも春めく。先週に国公立大学の前期試験が終わったばかりだが、明日は卒業式を迎える。

卒業生の高校生活は、1年生の冬、新型コロナウイルス感染症により一変してしまう。ある一国の一都市で発生したウイルスは瞬く間に全世界へ広がり、高校生活もウイルスとの闘いとなっていました。長期の休校に加え、部活動の大会が中止になり、修学旅行も行けなかった。夢に描いた青春とはほど遠い日々に、「高校生活が奪われた」と心の中で嘆いた生徒も少なくないであろう。

コロナウイルスは今年度も容赦をしなかった。校長としては、できるだけ平時通りの学校運営を行うつもりでいたが、教育活動は様々な制限を受け、創立記念祭などの行事は、変更を余儀なくされた。

あれは創立記念祭の3日後の昼休憩の時だった。3年生の男女2人が校長室を訪ねてきた。話を聞けば、野外劇を開催してもらえたことが嬉しかったので、感謝の気持ちを伝えたかった、とのことだった。本校伝統の行事である3年の野外劇は、コロナウイルス感染症による臨時休校のため延期させられ、さらに天候不順のため順延をせざるを得なかった。3年生の間では、開催を不安視する雰囲気が広がっていたのかもしれない。

ウイルスとの共存を運命として受け入れ、嘆きの言葉を吐露することもなく、肃々と制限を守って学校生活を送ってきた3年生たち。その彼らが、わざわざ足を運んで、謝意を伝えに来てくれた。丁寧に礼を言って頭を下げる爽やかな姿に、私の心は震えていた。

コロナ禍は人間や社会にいったい何をもたらしたのか。当事者である我々は、それぞれの世代、おのとの立場において、このことを検証する日がいつか来よう。平穏な日々を奪われたが、それらは当たり前でないという学びも得た。災禍がもたらしたもののは、決してマイナスばかりではないと思う。

高校生世代においても、制限の下で満足できないことも少なくなかったことだろう。人生でもっとも輝かしいはずの青春期から、不運にもきらめきが奪い取られたという思いがどこかにあって、それが「喉の渇き」となって残っているはずである。しかし、いつかこのウイルス禍が明けたとき、私はその渴きがそれぞれの人生において大きなエネルギーとなって作用すると信じている。

そしてまた、まぶたの奥に2人のあの姿が焼き付いている限り、コロナ禍を生徒たちに人格の高揚をもたらしたある種の幸運と呼ぶ勇気を、私は決して手放さない。

